特集　批評の現在

形から生まれる問い

ミケランジェロのディテールをめぐって

菅野裕子［建築史］

似たような形でも、スケールを変えたり、ディテールを変形させることによって、まったく別の意味を持つことがある。とすれば、一見同じ形に見えるものにも、ただ慣習的に作られたものと、既存の形との対比を意図されたものがあるのではないか。そんなことを考えたのは、2016年夏に再訪したフィレンツェで、ミケランジェロの建築を前にしていたときのことだ。彫刻家としてキャリアをスタートしたミケランジェロは、40歳を過ぎて本格的に建築を手がけるようになると、かたちに向き合う建築家となった。たとえばフィレンツェの3作品、メディチ邸の跪座の窓、サン・ロレンツォ聖堂新聖具室、ラウレンツィアーナ図書館階段室には、どれにも「持送り（渦巻装飾）」があり、それぞれが異なるバリエーションを見せている。だが、それは単なるディテールの遊びにとどまるものではない。古代ローマの、「正統な」規範に則った建築を作ることに精力を注がれていた時代に、彼はその規範を「かたち」として捉えなおし、少しだけなにかが異なる形を作り出したが、その似て非なる形は、既存の「建築」に対する問いでもあった。

重力から解放され、そして跪いたモチーフ

フィレンツェのメディチ邸は、ルネサンスの代表的なパラッツォ建築で、15世紀半ばにミケロッツォの設計で建てられた。16世紀初頭に改築されることになったとき、窓のデザインがミケランジェロに依頼されて誕生したのが破風を持つ矩形の窓［図1］で、その窓台を支える特異な「持送り」の形［図2］から、16世紀当時より〈跪座の窓（ひざまずいた窓／フィネストラ・インジノッキアータ）〉と呼ばれている。その形が跪いているように見えるからという説と、ちょうどその頃からフィレンツェ市民がメディチ家に跪かなければならなくなったことに対する皮肉だという説とがあるが[1]、それはともかく、このデザインはフィレンツェで一躍流行し、イタリア半島外にまで広まった。ただし、この「持送り」の奇妙さを正しく理解するためには、この形の出自から考える必要がある。「反転する二つの渦巻」からなるこの形は、コリント様式などの軒に見られるもので、水平方向の張り出しを支えるためには理にかなっている［図3］。ところが、90度回転させられると、この形に備わっていた重力への抵抗という合理性は消えてしまう[2]。ミケランジェロは、さらにそれを長く引きのばして異なるスケールにした上で、その表面から一切の装飾を取り除き、まるで抽象彫刻のように作り出したのだ[3]［図2］。

左）図1　メディチ＝リッカルディ邸の〈跪座の窓〉（フィレンツェ）。外枠のアーチ型は、当初はロッジァのための開口だったが、そこを閉じる改築の際に、この窓がミケランジェロによってデザインされた

右）図2　窓台を支える二つの持送りは、縦に長く引き伸ばされたS字形をしており、その表面にはまったく装飾がなくつるつるに仕上げられ、抽象形態のように表現されている

これと同じモチーフは、フィレンツェのサン・ロレンツォ聖堂新聖具室［図4］では、扉口の左右上部にみられるが、ここでもまた奇妙な形に変形されている［図5］。この新聖具室は、ブルネッレスキの旧聖具室［図6］と双子のような関係を持ち、聖堂を挟んでちょうど正反対の位置に建てられた。ここでミケランジェロは、灰色砂岩を基調としたブルネッレスキの形式を踏襲しつつも、さらに白い大理石を取り入れ、2色の石材を対比的に用いている。つまり、灰色砂岩においてはあくまでもブルネッレスキを模し伝統的な規則に従う一方で、白い大理石では、一見すると規則どおりだが実は徹底的に逸脱した造形を作り上げているのだ。いま問題としている持送りは、形の逸脱のある白大理石の部分に見られるもので、一体だったはずの形は正面と側面とに分解され、しかもフラットになった側面は扉枠と一体化してしまい、渦巻き形であることの表現も放棄されてし

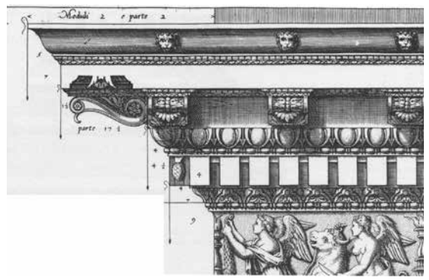

図3　コリント様式の軒。水平にS字の材がみられる

左）図4　サン・ロレンツォ聖堂新聖具室（フィレンツェ）。ミケランジェロの設計により1520年に着工。灰色砂岩（ピエトラ・セレーナ）と壁面の白色のストゥッコによってブルネッレスキの旧聖具室を模している

右）図5　新聖具室扉口の左右上部にみられる持送り。正面と側面が奇妙な形で分割され、平滑な側面は扉枠と一体化している

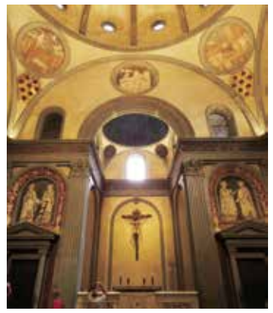

図6　サン・ロレンツォ聖堂旧聖具室（フィレンツェ）。ブルネッレスキ設計。柱やアーチを灰色砂岩で、壁面を白色のストゥッコで仕上げ、2色のコントラストが生かされたデザイン

まった。

さて、この新聖具室に関しては、しばしば、灰色砂岩が本来の建築として扱われているのに対し、白い大理石部分においては、人体の彫刻作品のみならず、柱やニッチといった建築の要素もが彫刻的に扱われていると解釈される[4]。しかし、ここでやや穿った見方をすれば、それらの建築の要素の「彫刻」は、灰色砂岩が表現する規則通りの造形もまた装飾的な彫刻でしかないことを、暴いているようにも見えてくる。だとすれば、それは、当時の一連の建築に対する根本的な問いであり、古代ローマ建築の研究が過熱していた文化背景を考えれば、ラディカルな問いであったはずだ。

伝統への回帰か、あるいは意味の反転か

一方、ラウレンツィアーナ図書館階段室［図7］では、大小の渦巻きが完全に表現されており、一転して、もとの伝統的な形に回帰したかのようにも見える［図8］。マニエリスム建築の代表例とされるこの階段室は、一般的には、柱は奇妙にも壁に埋められて荷重を支えず、その下の持送りも同様に荷重を支えていないと解釈されるのだが、もう一歩踏み込んで、この持送りにそれ以上の意味を求めることはできないだろうか。つまり、この持送りは「何も支えていない」のではなく、その弾力のあるバネのような形によって、上部の柱をより「不安定」に見せようとしているのではないだろうか（さらに、柱をその真下で「安定的」に支持すべき柱台が、柱ではなく両脇の窓の下へずらして置かれていることからも、「柱」というものを、それが本来担っていた「安定性」から逸らそうという意図がうかがえる）[5]。そうであれば、水平材を「安定的」に支えるため合理的だったこの形は、ここでは「不安定さ」という、まったく正反対の意味を担っていることになり、この渦巻とは、伝統的な表現へ回帰したのではなく、弾力性の表現によって、その意味を反転させていることになる。

こうして、水平材を支えるために合理的だった「反転する渦巻」という一つの伝統的な造形は、まずメディチ邸の窓では重力から軽やかに解放され、異なるスケールを獲得した抽象的なモチーフとなったのち、新聖具室では解体され、またラウレンツィアーナ図書館では新たな表現とともに生まれ変わった。特に後者二つでは、そのあり方自体が、建築全体に一貫するアプローチの象徴的な現れとも読める。

このように、形から新しい意味の可能性を引き出すことによって、あくまでも古典的な建築言語を用いながら建築を革新させようとしたのが、ミケランジェロという建築家だった。その建築表現には、常に対比されるべきオリジナルというものがあったから、その意味において、彼の作品自体が「建築」に対する批評でもあったのである。

左）図7　ラウレンツィアーナ図書館階段室（フィレンツェ）。ミケランジェロの設計により1524年着工。壁に埋まった柱や、壁から独立した立体彫刻のような階段を特徴とし、マニエリスム建築の代表作品とされる

右）図8　ラウレンツィアーナ図書館階段室の持送り。大小の渦巻きが完全に表現されているだけでなく、凹凸の筋が二重になっている

最後にここで、ミケランジェロを評したヴァザーリの言葉に触れたい。歴史的な批評というものは、過去からの連続性の中に現在を位置づけるだけでなく、しばしば、連続的に見える現在に潜む不連続性を見いだす。そして、ミケランジェロと同時代に生きたヴァザーリも、当時すでにその決定的な変化を見抜いていた。たとえば、新聖具室に関しては「ヴィトルヴィウスや古代のもの」とは「まったく違った風に」作り、それを見た人々に「模倣しようという気を大いに興させた」と証言している[6]。ここで見過してはならないのは、それを、名声高きミケランジェロがやったことが重要だったということだ。つまり、ほかならぬミケランジェロが「決まりきった手段で行ってきた仕事の落とし穴や鎖をうちやぶった」からこそ、他の芸術家は「彼のおかげを蒙」り、規則からの逸脱の免罪符を得ることができたのである。

さて、ミケランジェロのおかげを蒙った芸術家たちは、バロックの表舞台を歩いてきたわけだが、さらにその末裔ははるか遠い極東の島まで到着している。たとえば、この横浜の馬車道に建つ、神奈川県立歴史博物館の列柱には新聖具室同様の筋模様がみられるし、旧安田銀行（現・東京芸術大学）の窓の支えは〈跪座の窓〉のバリエーションとして作られている［図9］。ヴァザーリは自らの時代の裂け目を見いだしたが、その言葉ははるか未来の異国の建築も言い当てている。■

図9　横浜の馬車道駅前に建つ旧安田銀行横浜支店（安田銀行営繕課、昭和４年）の窓台には、変形された持送りのような形が見られる

註

1　*Michelangelo e il Disegno di Architettura*, ed. Caroline Elam, Marsilio, 2006. pp. 178–179
2　ただし、このように縦に使う例は古代より例がある
3　Gabriele Morolli: *Scucendo e ricucendo : Gherardo Silvani e l'invenzione delle mensole 'impunturate' per le finestre inginocchiate di Palazzo Guadagni*, [OPVS INCERTVM, Anno II, numero 3, Edizione Polistampa, 2007, pp. 53-65]
4　たとえば、下から矩形の枠が入り込んでいる破風や、柱頭や柱礎などにもオリジナルな造形が見られる
5　この視点はフィレンツェ大学のガブリエーレ・モロッリ教授の講義より示唆を得たものである
6　G・ヴァザーリ『ルネサンス画人伝』平川祐弘・小谷年司・田中英道訳、白水社、1982年、p. 255（G. Vasari: *La vita di Michelangelo nelle redazioni del 1550 e del 1568*, a cura di P. Barocchi, Milano - Napoli, 1962）

図版クレジット

図1、2、4～9：筆者撮影
図3：Jacopo Barozzi da Vignola: *Regola delli cinque ordini d'architettura*, Roma, 1562

Yuko SUGENO

西洋建築史。本学大学院特別研究教員。1993年横浜国立大学大学院修了。博士（工学）。2006-07年フィレンツェ大学建築学部客員研究員。「建築と音楽」（共著、NTT出版、2008年）、「14歳からのケンチク学」（共著、彰国社、2015年）、「図面でひもとく名建築」（共著、丸善出版、2016年）、「建築の書物／都市の書物」（共著、INAX出版、2000年）、「くらべてわかる世界の美しい美術と建築」（共著、エクスナレッジ、2015年）